

歩け歩け余生はいらない —伊能忠敬 天命の旅路—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

測量は土地、河川、建物などの位置関係を測定し、距離、面積、角度などを縮尺して地図に表示する。史上初の日本全土の地図づくりを牽引した伊能忠敬（1745-1818）は17年かけて前人未到の全国測量を成し遂げた。

もともと測量を専門にしていたわけではない。商人として成功し、資産を築いて引退したあとに江戸に移り住み、本格的に天文学を学んで測量の知識と技術を身につけた。

最初の測量の旅である蝦夷地（北海道）に出発したときはすでに55歳に達していた。きわめて危険で無謀な企てと引き止めた者も少なくないだろう。だが伊能は耳を貸さなかった。人生50年といわれた短命の時代に青年のような気概に燃えて見果てぬ夢を追いかけた。

歩測と天体観測に熱中

伊能は上総国山辺郡小関村、現在の千葉県山武郡九十九里町小関の網元として代々名主を務める小関家に生まれた。幼名は三治郎で兄と姉がいた。

6歳で母を亡くし、婿養子の父は兄と姉を連れて酒造業を営む実家に戻った。小関家の祖父母に育てられた伊能は10歳のとき父に引き取られる。熱心に勉学に励み、とくに算術が得意だった。

17歳になった伊能は治水工事や土地改良工事で才覚を発揮し、現在の香取市佐原で酒造や舟運などを広く手がける伊能家に婿入りした。名家の

跡取りとして名前を忠敬に改名する。

当時の佐原は利根川を利用した運送の中継地として栄えていた。実直で働き者で賢明な伊能は家業を繁盛させ、36歳の若さで名主になる。

1780年代に東北を中心に起きた天明の大飢饉では悪天候に加え、岩木山や浅間山の噴火で火山灰が降り注ぎ、農作物の収穫が激減した。伊能は私財を投じて米や金銭を貧しい人々に分け与えた。こうした努力によって佐原から餓死者はひとりも出なかったという。

危機を脱し、ふたたび商売が軌道に乗ると隠居して暦の作成に欠かせない暦学を究めたいと願うようになった。暦学は星などの天体と地球の関係性について研究する天文学と深くかかわっており、江戸から書物を取り寄せて暇があると読み耽った。

50歳になった伊能は家督を長男の景敬に譲り、江戸に出て深川黒江町、現在の江東区門前仲町に家を構えた。幕府天文方で19歳年下の高橋至時に弟子入りし、寝る間も惜しんで学問に精を出す。自宅で天体観測を行うために高橋の同僚の間重富や細工職人の協力で高価な観測機器を取り揃えた。ついに完成した天文台は浅草の幕府天文所にある天文台と比べても見劣りがしなかった。



富岡八幡宮の伊能忠敬像

自宅と浅草を往復するときは一定の歩幅で進んでいく歩測の訓練を積み重ねた。当時、測量は歩測で行われていた。伊能の歩幅は69cmで全体の歩数から距離を計算した。夜は天体観測に熱中し、夕方になると慌てて帰宅した。

後世の役に立つような仕事

江戸に来て5年の月日が流れ、伊能を取り巻く社会情勢も急激に変化していた。蝦夷地では帝政ロシアの船が来航し、かつてなく緊張が高まっていた。不測の事態に備えて幕府の役人の近藤重蔵や最上徳内が現地調査を進めていた。高橋至時は蝦夷地の正確な地図をつくる計画を立案し、幕府に速やかな測量を願ひ出る。現場責任者には高橋が信頼する伊能を抜擢した。高齢にもかかわらず伊能は懸命な努力で弟子を抱えるほど高度な技術を体得していた。のちに幕臣から北海道開拓使に転身する榎本武揚の父親も弟子のひとりだった。

1800年4月、幕府から正式に蝦夷地の測量を命じられた伊能は弟子たちを率いて意気揚々と自宅から出発する。近所の富岡八幡宮で道中の安全を祈願し、高橋の自宅に立ち寄ってから千住で親戚や友人の見送りを受けた。測量器具を運ぶ馬2頭も加わり、奥州街道を北上しながら測量を開始する。昼は海岸沿いを交代で歩測し、曲がり角に来ると方位を測定した。夜は経緯度を決めるために北極星などの天体観測を行った。寒くなるまえに測量を終わらせようと1日約40kmという驚異的な速さで移動する。

蝦夷地の道は険しく難所つづきで草鞋も次々と破れていった。本州のように宿がほとんどなく集会所や地元の役人の家で寝泊まりした。

10月下旬によく当初の目標を達成し、疲れ果てた身体で江戸に向かう。千住に辿り着くと、家族をはじめ大勢の人々が出迎えた。

蝦夷地の第1次測量にかかった日数は180日、このうち蝦夷地における滞在日数は117日に及んだ。実行にあたって伊能は測量器具の購入などに70両ほど支払い、旅に持参した100両もほぼ使い切った。しかし幕府から与えられた測量手当は22両程度に過ぎなかった。それでも伊能は測量の継続を申し入れる。伊能にとって天体観測も測量も

自然の天命であり、ただ「後世の役に立つようなしっかりとした仕事がしたい」という一途な想いに貫かれていた。

一身にして二生の如く

第1次測量から帰還後、3週間ほどかけて作成した蝦夷地の地図が幕府に評価され、測量の続行が認められた。翌年から開始した伊豆・本州東海岸測量では歩測ではなく一間（約180cm）ごとに印をつけた間縄けんなわを使う方法に変更した。海岸線は複雑に入り組んだ地形が多く命がけで断崖絶壁を登ることもあった。第2次測量後、東海・北陸、近畿・中国、四国、九州、伊豆半島、江戸内などを測量する。その過程で師匠の高橋が41歳の若さで亡くなった。これ以降、伊能は毎朝、高橋の墓がある上野の源空寺の方角に手をあわせていたという。幕府天文方は長男の景保に引き継がれた。

計画していた測量をすべて終了した伊能らはいよいよ最終的な地図の作成に取りかかった。蝦夷地については幕府御庭番で間宮海峡を発見した間宮林蔵が測量資料を提供した。伊能は秋頃から持病の喘息が悪化し、病床に臥すようになった。病状は回復せず74年の起伏に充ちた生涯を終える。臨終の間際に恩師の高橋のそばで眠りたいと言ひ遣し、高橋と並んで源空寺に墓が建てられた。

地図はまだ完成しておらず作業は弟子たちに引き継がれた。1821年ついに大図・中図・小図よちの種類による大日本沿海輿地図が完成する。輿地とは大地を意味しており、伊能の功績を記念して伊能図と呼ばれた。のちに高橋景保はオランダ商館の医師シーボルトに地図を贈った罪で獄死する。

17年間に及ぶ測量の旅で伊能が歩いた距離は総計で3万5千kmにのぼっている。過酷な旅路でありながら「歩け、歩け、つづけることの大切さ」、「夢を持ち前へ歩きつづける限り余生はいらない」という朗らかな言葉が伝えられている。

慶応義塾を創設した福沢諭吉は日本と西洋を比較した著作『文明論之概略』で幕末前後の激変の時代を生きる自己を顧みて「一身にして二生を経るが如し」と書き記した。商人から測量家に転じた伊能もまた一身にして二生の旅路をひたすら歩みつづけた。